メゾン・ド・プレザンスと十八世紀のドイツ建築

—フランス・ドイツ啓蒙主義建築思潮研究 その2—

MAISON DE PLAISANCE AND GERMAN ARCHITECTURE IN 18TH CENTURY

—A study on the trend of architectural thought between France and Germany
in 18th century enlightenment Part 2—

市川 秀和*

Hidekazu ICHIKAWA

In this second paper about "A study on the trend of architectural thought between France and Germany in 18th century enlightenment", I tried to make clear the historical adoption of "maison de plaisance" in Germany. The meanings and functions of "maison de plaisance" was a country house-style of late baroque-rococo in France and Germany. In the first paper, I treated of the problem of the original notion of "maison de plaisance" in France. From this viewpoint, one can say that the remarkable book was "De la distribution des maison de plaisance et de la décoration des édifices en général (2.vol., 1737-38)" of Jacques-François Blondel (1705-1774), who was one of the most important French architectural theorists in the 18th century. The notion of "maison de plaisance" was connected with "bienséance(convenance)", "commodité", "distribution", "économie" and "variété". They made the turning point of architectural thought from 17th century to 18th century.

On the adoption of "maison de plaisance" in Germany, "Blondel-School's architects" took an important role. Generally, the development of adoption is divided into three periods. In the short, the first period is late baroque(1720's-30's), the second is rococo(1740's-50's) and the third is early classicism(1760's-70's). In conclusion consequently, I publish to more profound investigation of the transformation in architectural thought between France and Germany.

Keywords : Maison de plaisance, 18th century, German architecture, Blondel-School, Late baroque, Rococo

メゾン・ド・プレザンス(別荘), 十八世紀, ドイツ建築, ブロンデル学派, 後期バロック, ロココ

1. はじめに……「十八世紀のドイツ」について

前稿¹⁾では、十八世紀初期フランスで誕生した「メゾン・ド・プレザンス Maison de plaisance (以下「別荘」と訳す)」の建築思潮史的意義が、種々の建築書の系譜上から啓蒙的諸概念の抽出を通して考察された。その際に「別荘」のモデル理念を考案し、この制作普及に多大な影響を及ぼした建築理論家 J.F.ブロンデル(1705-1774)による著書『別荘の間取りについて』(1737-38)²⁾に注目したのである。従って引き続き本稿では、このフランスで確立された「別荘」がドイツへ如何に受容されるのかを、ブロンデルの「別荘」論に影響を受けた建築家たち、所謂「ブロンデル学派」を通して究明し、十八世紀ドイツ啓蒙主義建築思潮の一面を照射することが試みられる。ただし前稿と同様に、イタリアのヴィツァとの関連は一応保留としておきたい。

ところで前稿でも触れたように、十八世紀ヨーロッパの後期バロック・ロココへの積極的な再評価が広く定着するのは漸く十九世紀末以降のことであり、ドイツ人研究者の活躍が最も多であった。その動向はフランスやイタリアを中心に始まったもののドイツに関しては最も遅く、1922 年に出版された二つの著書から、つまり文化史家 M.v.ペーンの『十八世紀のドイツ—その啓蒙主義—』³⁾と美術史家 H.シュミットの『ドイツにおける十八世紀の芸術と文化』⁴⁾による総合的な研究成果によって、ネガティブに捉えられていた「十八世紀のドイツ」のイメージを有効な問題性に満ちた研究対象へと、

従来の認識を刷新させ始めたと言える。この二著は当然のことながら、先行するドーメ⁵⁾やグルリット⁶⁾、プリנקマン⁷⁾、ビンダー⁸⁾、ヴァッカーナーゲル⁹⁾、ハービヒト¹⁰⁾など、十八世紀ドイツ建築史の基礎研究を踏まえた内容であり、今なお最も参考に値する。その後、ドイツのバロック・ロココ建築を特徴づける幻想的な教会堂や宮殿階段室、劇場などの作品研究や、来たる十九世紀(新)古典主義への展開に着目する研究が主流として続けられており、そして現在全七巻(ドイツ各地域別)の予定で刊行中の建築史家ヘックマンによる大著『バロックとロココの建築家』(1996-) ¹¹⁾にこれまでの研究全貌が集大成されつつある。このような従来の実証的な基礎研究と対照的に、近年さらに十八世紀ドイツ建築の批判的見直し作業が活発化しつつあるなかで、マルコヴィッツの論文「十八世紀ドイツ宮廷におけるフランス人建築家」(1992) ¹²⁾は、シュミットの著作以来ほとんど注目されていない課題を新たに広く深めた論考であって、前稿で参照した僅かな研究文献と合わせて、本稿に有益な示唆を与えてくれた。十八世紀ドイツ建築をフランスからの「別荘」を通して究明する視点は、当時の時代状況を汲み取ると正当でかつ有効な課題であるが、これまでに十分な考察はされていない¹³⁾。

よって以下に、新たな建築思想を有する「別荘」と「ブロンデル学派」を手がかりに、十八世紀のフランスとドイツに見られる豊かな知的交流が描き出され、啓蒙主義建築思潮研究の有効性がさらに指摘されることになる。

* 福井大学工学部建築建設工学科 助手・博士(工学)

Research Assoc., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Fukui University, Dr. Eng.

註：◆ドイツの「Maison de plaisance」に携わったブロンデル学派とその周辺の建築家を対象とする。表内の配置に関しては、中央から右下においてブロンデル学派とその影響下のドイツ人建築家を置き、左上にはフランス・アカデミー派とその影響下のドイツ人建築家を置く。なお後期バロック・ロココにおいて殊に重要な「教会建築家（例えば、G.Bähr, Familie-Dientzenhofer, D.Zimmermann, Bruder-Asam, F.M.Fischer など）」やオーストリアの建築家（Fischer von Erlach, Hildebrandt, J.Prandtauer など）は対象外として含めていない。

◆矢印は、直接の師弟関係を示すが、ここに挙げた建築家たちは、多かれ少なかれ影響を与え合っていたと考えてよい。

◆建築家名の上のドイツ地名は、そのドイツにおける主な活動場所を示す。

◆左隅にはドイツ・フランスの建築史にとって重要な時代状況を示し、右隅には建築様式を示して対応させ、便宜的に点線で大まかに区分してみた。ただし、点線区分はあくまでも便宜的なものであり、それぞれの建築家の性格は、その区分を超えてまたがっているのが実状である。

◆IVのバロック的古典主義とVのロマン主義的古典主義は、ギーディオンの学位論文(1922)に拠っている。またバロック的古典主義とは、十七世紀フランスのものとは同一ではなく、後期バロックを基調にして古典主義的性格が付与されたものであり、かつては Zopf Stil と呼ばれた。

◆本文第3章での時代区分は、この表でのⅢとⅣに対応する（Ⅲ=A+B, Ⅳ=C）。

2. 十八世紀ドイツの宮廷社会にみる「フランス嗜好」

十八世紀初期フランスで確立した小規模の私的な「別荘」がブロンデル学派によってドイツ各地に建設されていく動向を考察する前に、ドイツに濃厚な「フランス嗜好」について「宮廷文化の普及」と「建築家の登用」の二点から、まず簡潔に触れておきたい。

2-1) フランス宮廷文化の普及：「別荘」の受容へ

1648年の三十年戦争終結以降、ヨーロッパ芸術文化の中心拠点とは、それまでのイタリア諸都市からアルプスの北部へ、すなわちフランスに移ってゆく実態が明瞭に現れ始めた。それは殊にマザラン宰相死去の後にコルベール宰相へ代わって、ルイ十四世を頂点とするフランス絶対主義王政がヨーロッパ随一の大国となって誕生した時に最も明確となり、その王都パリや近郊のヴェルサイユでの宮殿建築や庭園、都市の景観には、「フランス的ヨーロッパ」の呼称に相応しい栄華が築き上げられたのである。「ルイ大王の時代」のフランスには、新たな芸術文化を創造する豊かな母胎が育まれていた。また一方で、三十年戦争の絶大な被害を最も被ったドイツで国土再建が着手されるなか、その中心は宮殿再建の一連事業であり、十七世紀末から十八世紀初期にかけて本格化した。その際にドイツ諸侯が揃って手本にしたのは、ルイ大王の生活舞台であるヴェルサイユの栄華そのものであった。ドイツにとってフランスは政治経済だけでなく芸術文化においても決して対等な立場ではなかった¹⁴⁾。

そこで1701年に漸く一選帝侯国から王国へと昇格したプロイセンでは、ルイ大王のパリやヴェルサイユに劣らぬ壮大な王都ベルリン建設の実現に向けて、フランス流の宮廷文化を精力的に取り入れ

ていた。それは1740年に即位したフリードリヒ大王の熱狂的な傾倒ぶりに明らかであり、公の社交界だけでなく私的な日常生活もフランス語で会話を楽しみ、手紙も作詩も著書も瑞々しい表現性の溢れるフランス語で執筆し、また哲学者ヴォルテールを招いてフランス風のサロンを開くなど、そのフランス嗜好から創出された芸術文化は「フリードリヒ・ロココ」と称讃された。こうしたフランスの宮廷文化を愛好する模様は、ドイツ諸侯の宮廷ではどこでも見られる光景だった。1733年にベルリンで出版されたロールによる『エチケット入門』¹⁵⁾には、フランスを模範としたドイツ宮廷生活でのさまざまなエチケットが詳説されている。フランス語を流暢に話して、フランス流の礼節で振る舞い、フランスの生活文化に満たされているのが当時のドイツ宮廷貴族として最も相応しい姿だった。そのうえロールの著書には「貴族は一般的に、休息のための別荘(Lusthaus)や狩猟館(Jagdhaus)を郊外に持っており、そこでは宮廷での厳しい礼節は感じられず、より自由でより享楽に過ごす」という記述があり、ここで注目される。つまり十八世紀初期フランス宮廷での厳格な礼節による公的な社交生活に嫌気を感じた王侯貴族が、「別荘」での気楽な安らぎに満ちた私的な住生活を尊重する態度に変容すると、ドイツでも「別荘」を好んで受け入れたのである。

2-2) フランス人建築家の登用：ブロンデル学派の活躍へ

ドイツ諸侯の宮廷内でフランス貴族の生活文化が普及してゆく動きに合わせて、フランス人芸術家がドイツへ頻繁に招聘され始めた。そこでヴェルサイユの大規模な造営をみると、建築家のル・ヴォ

ーやアルドゥアン＝マンサールを始め、画家のル・ブラン、造園家のル・ノートルなどが共同するなど、当時の最も優れた芸術家たちが総動員された末に、そこには絶対的な君主の偉大さが圧倒的な威圧感となって象徴的に造形化されたのである。大国の頂点に立って絶対的な権威を掌握した君主には、自らの存在を大規模な造形へ象徴的に創造できる芸術家こそが最も必要とされ、殊にスケール感覚の大きな建築創造に強烈な魅力を感じたことであろう。ドイツ諸侯がルイ大王のヴェルサイユを手本としたのは、このような大規模建築の壮大な象徴性に最も惹きつけられたからではなかろうか。またヴェルサイユ建設中の1671年にはコルベールの指揮の下で「建築アカデミー」が設立され、宮廷社会からの要望に応える建築家の養成が国家プロジェクトとして始まった。従って王侯貴族は、自らの好む専属の建築家を強く求め合い、また国家の保護と期待を担うアカデミー派の建築家は宮廷に請われて大々的な活躍を展開した。そしてフランス宮廷文化に染まったドイツでは、専属のフランス人建築家を望む動きが活発化してゆくのであった。¹⁷⁾

さらにドイツ諸侯にとってフランス人建築家の登用を促した要因に、1685年「ナントの勅令廃棄」という歴史的事件を見落せない。フランスを追われたユグノー教徒に対して、プロテスタント系・北ドイツ地域のプロイセンやザクセン、ヘッセンなどの諸侯はその亡命を積極的に受け入れた。ユグノーのなかには芸術家や技術者が多かったために、彼らのドイツ移住は結果的にドイツ再建に貢献したのである。例えば先にも触れたプロイセンの王都ベルリンの宮殿建設では建築家シュリューターを中心に、「アカデミー派」でユグノーの建築家ブレーブやロングリュース、ド・ボーが参加して、フランス栄華を彩ったバロック的古典主義のスタイルで仕上げられた。さらにドイツ各地の宮殿建設は相次ぎ、ドレスデンのツヴィンガー宮殿やミュンヘンのニウムフェンブルク宮殿、ケルンのブリュール宮殿、さらにその他にカッセル、ダルムシュタット、マンハイム、シュトゥットガルト、カールスルーエなどには必ずフランス・アカデミー派の建築家による活躍が入っていた。従ってフランス人建築家の登用はドイツ各地の宮殿や都市の再建・拡張に多大な働きをもたらして、フランスの建築文化をダイレクトに伝えたのである¹⁸⁾。

以上のように、「ルイ大王の時代」のフランス宮廷文化が広く定着したドイツ各地域には、十八世紀初期に到って公の宮廷社交以上に私的な生活空間の充実が普及して、その建築的場所である「別荘」が創られ始めた。またフランス人建築家の登用を望んだドイツは、ユグノー亡命を好機にして「アカデミー派」を多数受け入れたが、新たな「別荘」受容の頃には「ブロンデル学派」が活躍し始めた¹⁹⁾。そこでドイツの「別荘」に携わったフランスとドイツの建築家を配列して纏めたのが[表-1.]である。アカデミー派との衝突の中で漸く1743年にパリで開校したブロンデル芸術学校の最も繁栄した1750年代とは「別荘」の盛期と重なり、ブロンデル学派の活躍は十八世紀前半のフランスとドイツを強く結び付けていたのである。

3. 十八世紀ドイツの各地に広がるブロンデルの「別荘」論

—後期バロック・ロココから(新)古典主義—

それではドイツ各地に広がるブロンデルの「別荘」論を取り上げるに当たって、ドイツの建築書にみる「概念」と実現した「作品」との両面から考察する。

3-1) 十八世紀前半のドイツ建築書にみる「別荘」の概念

十七世紀ドイツ建築思潮において最重要なフルッテンバッハ(1591-1667)は、パッラーディオやスカモッツィなどの影響から数多くの建築書を著したが、その中には「Villa」に対応する「Landhaus」の計画案が見られる²⁰⁾。この十七世紀ドイツに流布した「Landhaus」とは、円形広間を中央に持つ9等分割された正方形の平面構成であり、立面もと合わせて明らかにイタリアからのものであるが、「ルイ大王の時代」へと移行するにつれてフランスから「別荘 Maison de plaisance」が「Lusthaus」(時には「Lustgebäude」)と独訳されて普及し始めて、次第に「Landhaus」は色褪せて変容を余儀なくされた。この「Land-」から「Lust-」への変化に、十七世紀から十八世紀への質的な転換がよく表れているように思われる。また「別荘」が「Lustschloß」と訳されて使われる場合もしばしばあったが、「-schloß」の語感は大規模で公的なニュアンスの印象が強いのに対し、「-haus」や「-gebäude」は小さな個人の私的な住空間を想像させる。ではドイツに受容された「別荘 Lusthaus」の概念について、十八世紀前半の代表的なドイツ建築書を通して考えてみたい。

そこで1696年のシュトルム(1669-1719)による『ゴルドマン・市民建築論』出版は、建築家だけでなく広範な知識人に大きな衝撃を与え²¹⁾、1699年の第二版にはシュトルム自身の付論や計画案が含まれており、そこに「君主の別荘(Gartenhaus)」案が見られる²²⁾。このシュトルム案は、平面では中央に楕円広間を極端に大きく取って均整ある正方形の9等分割を崩し、立面ではマンサード屋根の上に巨大な楕円ドームとそれを囲む四隅の高く突出する小棟が目立ち、ヴォーヴル＝ヴィコントなどの影響が伺える。また後にシュトルムはペローらによるオーダー論争から「ドイツ式オーダー」を考案し、また新しい建築概念「commodité」などの実践導入を試みるが、この案には未だその考慮は明確に反映していないものの、フルッテンバッハから峻別される新たな傾向が認められる。

さらに1711年出版のデッカー(1677-1713)による『君主の建築家』(第一巻)は、建築家や王侯貴族に決定的な建築創造の指針を提示したが、続く補遺版(1713)には「Lust-Haus」案が含まれている²³⁾。中央に円形広間を持つ9等分割された正方形平面やフランスの都市邸館風の外観にドームが付く立面には、シュトルムとさほど大差はないものの、新たに「commodité」の概念を平面へ適応しようと、ポーチのない後背面には室内と庭園が連鎖するように部屋割りを試みるなどの進展がはっきりと読み取れる。

要するに十八世紀初期ドイツを代表する建築理論家のシュトルムやデッカーには、来たるべきフランス宮廷文化の「別荘」受容へと到るまでの過渡的で準備的な段階が顕著に表現されていた。なお前稿で触れたように同時期のフランスでは、建物を「公」と「私」とに明確に分け、そのなかでも私的な住空間に要求される「ピアンセアンス」や「快適性」、「間取り」などの新たな概念が大きく問題化され、この時に出版された数々の重要な建築書、例えば1691年出版のダヴィレによる『建築講義』や1706年出版のコルドモアによる『新建築総観』などは、ユグノーの建築家などを通してドイツへ持ち込まれて「教科書」的扱いで広く多用された。さらに1723年にはジャン・マロ親子の『フランス建築図面集』が出来し、いっそう啓蒙的諸概念の認識がフランスで定着してゆくとともに、このジャン・マロの弟子ブレーブはユグノーのためにベルリンへ亡命し、この

【A】初期：1720-30年代

庭園側ファサード

一階平面図(上：庭園側)

図-1.) J.-F.ブロンデル(1705-74)
「別荘」のモデル案(1737)

新たな建築思想を実践するとともに、『プロイセン国王陛下の宮殿と別荘の俯瞰図集』(1733)24)を遺した。このようにシュトゥルムやデッカーによって過渡的な思想的土壌が整えられつつ、フランスで論議の重ねた新しい建築思想とその実践活動が「別荘」という私的な邸館建築に集約されながら、ドイツへ受容されたのである。

それで実際のところドイツの「別荘」受容にあたり、1737-38年出版のJ.-F.ブロンデルによる『別荘の間取りについて』(全二巻)がそのモデル案を提示するとともに、その制作普及に大きく寄与することになる。そこで同時期のドイツで、1738年出版のツェードラーによる大部の『百科事典』(1738)にある一項目「別荘 Lusthaus」を見ると、「この庭園内にある別荘は、庭園のより楽しく快適な利用をもたらしてくれる」25)と短いものの、ブロンデルに先行するダヴィレの建築事典を思わせるような簡潔な記述が見受けられる。ところが数年後の1744年出版のペンターによる『市民建築論・建築事典』の項目「別荘 Lusthaus」をさらに見ると、「この別荘(Lusthaus, Maison de plaisance)とは、庭園内に建つ邸館であり、日常の住まいに使われるだけでなく夏期の離宮としても使われ、住生活の変化や潤いのある雰囲気を作り出される。この貴族のための享楽の邸館は、高貴な建築的構成で創られている。これについては、1737年に出版されたJ.-F.ブロンデルによる著書『別荘の間取りについて』が、いろいろと役立って有益である。」26)という詳述があり、ドイツの受容におけるブロンデルの果たす重大さが確認される。

以上のように十八世紀初期ドイツにおける「別荘」の概念をめぐって代表的な建築書の系譜を辿ってくと、ブロンデルの著書へ絶制的に行き着くことが明らかとなった。では次にこのブロンデルの影響から「別荘」の実作が普及してゆく展開の模様を考察する。

庭園側ファサード

一階平面図(上：庭園側)

図-2.) F.de キュヴィイエ(1695-1768)
「ファルケンスト狩猟館」(1729-34)：地図①

3.-2) ブロンデル学派の活躍による「別荘」の展開27)

ドイツの「別荘」受容の展開過程をブロンデル学派の活躍から三つの時期に区分整理(A:B:C, ⇄ [表-1.] III:IV)して考察し、その変遷に後期バロック・ロココから(新)古典主義への動向を見出したい。

【A】初期：1720-30年代

J.-F.ブロンデルの『別荘の間取りについて』が未だ出来していない1734年に、ライン河畔の古都ケルンの南西部近郊にあるブリュール宮殿の敷地内に、パリエルのフランス人建築家キュヴィイエによる小さな別荘「ファルケンスト狩猟館」(1729-34 図-2., 地①)が完成していた。この作品は後のブロンデルによる「別荘」モデル案(図-1.)と不思議なほどよく似ている。ブロンデルがこのキュヴィイエの実作から影響を受けたのかどうか不明であるが、ただ1720年代にパリのジャン＝フランソワ・ブロンデルの下で共に建築の修業を積んだ二人にとって、それぞれフランスとドイツの地でありながらほぼ最初の仕事が「別荘」だったことから、十八世紀初期宮廷社会にこの小さな私邸の持つ意義は大きいと言わねばなるまい28)。

ともかくキュヴィイエの「ファルケンスト」は、ブロンデルのモデル案から見ると規模がかなり縮小されているものの、フランスの新たな建築思想をドイツで実現できた最初の「別荘」作品である。平面では、丸みある正方形の玄関ホールから真っ直ぐ通じた丸みある長方形大広間が庭園側へ緩やかに迫り出し、これを中軸にして左右対称に個人の諸室が快適性や機能性を考慮して配置されている。彫刻装飾のない立面では各層の窓や中央張り出し部分の窓を変えてアクセントを施し、マンサード屋根と展望台(Belvedere)が付けられただけの簡素なものの、全体には高貴で清楚な優雅さが漂っており、まさにこの作品はブロンデルと全く同質の性格を有する。

【B】盛期：1740-50年代

庭園側ファサード

図-3.) S.L. デュ・リー (1726-99)

「ヴィルヘルムスタール邸館」計画案(1750)：地図④

一階平面図(上：庭園側)

ところがこの直後にキュヴィイエは、ミュンヘン西部近郊にあるニュムフェンブルク宮殿敷地内に「アマリエンブルク狩猟館」(1734-39,地②)を設計した。これは南ドイツ・ロココの代表作品として有名であり、「ファルケンlust」の平面を受け継ぎながら、同じ狩猟館とは言え滞在を目的としないために必要な諸室も少なかったことが自由な造形の実現に有利となって、新たな展開を見せ始めたと考えられる。平面では中央の円形広間があまりにも大きく占めて、そのために庭園側立面では球状形態がマンサード屋根全体を前方へ張り出し、その水平に広がる華麗な流線は実に美しい。新たな創造に意欲的な若きキュヴィイエは、カルトの「モンモランシー邸館」(1708)やボフランの「スーピース邸館」(1732-39)などに見られる楕円空間に刺激を受けて、この独特な「別荘」を創り出したのである。またそのほか、古都ヴァイマルから南西部チューリングゲンの深い森の中に建つ、クローネ設計の「ドルンブルク城館」(1736-43,地③)は、ブロンデルのモデルに則った美しい作品である。

よってブロンデル以前のキュヴィイエの作品から、既に「別荘」の要請がドイツでかなり強かった模様は明らかであり、ブロンデルの著書出版はまさにこうした時代動向に応じて、建築家の思想や実践に大きな影響を与えることになった。この初期段階に見られた、ブロンデルのモデル案を基本に制作する建築家と、キュヴィイエのように基本にしながらも円形広間を中心に独創的な設計を試みる建築家との「二つのタイプ」は、この後の展開を決定的に方向づけた。

【B】盛期：1740-50年代

この時期に到ると後期バロックの性格は完全に弱まって、室内空間や生活調度品などを主な対象とするロココ芸術の興隆とともに、また一方で新古典主義の萌芽も徐々に見え始めるものの、「別荘」

庭園側ファサード

一階平面図(上：庭園側)

図-4.) N.de ビガージュ (1723-96)

「ペンラート邸館」(1755-68)：地図⑦

やその住文化は盛期をむかえてドイツ各地に数多く建てられた。

まずカッセル宮廷のユグノー建築家系のS.L.デュ・リーは、ブロンデルの芸術学校在学中に故郷に建てる予定で「ヴィルヘルムスタール邸館」案(1750,図-3,地④)を計画した²⁹⁾。師ブロンデルのモデル案を基にかなり規模は縮小しているの、先の「ファルケンlust」によく似ている。「別荘」の平面特徴である玄関ホールと大広間の繋がりはこちらでも明確なものの、広間のスペースが極端に大きく取られたのは、ロココ芸術興隆のなかでサロン文化などがいっそう重要視される動向を反映したためである。玄関ホールから大広間へ入るとダイナミックに空間が大きく開かれ、しかも庭園へと繋がった明るい室内に優雅なロココの美意識が彷彿する。立面のブロンデルにはない三角ペディメントは、巨大な広間を外観デザインに反映させたためであり、また当時ボンペイ(1748)などの発掘によって再び始まる古典思考の反映かも知れない。さらにこのデュ・リーから想像されるように、ブロンデルはその著書をテキストにして学生に「別荘」を教授していたであろうから、時代の要請にも合致して教え子たちに踏襲されたであろう。このデュ・リー案は後に、キュヴィイエによって手が加えられて実施に移された(1753-55)。そのほか、西南ドイツで活躍したブロンデルの高弟ディクスナールの「ドナウリーデン邸館」(1745-47,地⑤)や、ドレスデンの独特なバロックのなかで育ちながらもフランスの建築思想に傾倒したクループザツィウスの初期作品「マルティンキルヒェン邸館」(1751-56,地⑥)などは、ブロンデルのモデル案を忠実に踏襲した好例である³⁰⁾。

さらにブロンデル学派の一人で個性的なピガージュによる「ペンラート邸館」(1755-68,図-4,地⑦)は、ロココの美を結晶させた秀逸な作品であり、独創的な表現に満ちた「別荘」である。マンサード

【C】後期：1760-70年代

庭園側ファサード

一階平面図(上：庭園側)

図-5.) P.ド・ラ・ゲビエール(1715-73)
「モンレボス邸館(湖の館)」(1760-64)：地図⑨

屋根の緩やかな曲線とその全体を崩さないように控え目な丸屋根の形状、そして狩猟を象った彫像を掲げているなど、ブロンデルの造形的な統一感をよく受け継ぎながらも、ピガージュ独特の気品ある優雅さが建物の内外全体に醸し出されている。その平面では、奥長の玄関ホールと円形広間を中軸に光庭を挟みながら住空間がアパートマン・ドゥブルに配置され、快適性や利便性が実践されている。また側面の屋根に付けられたペディメントや柱のデザイン、室内装飾のモチーフなどに古典主義造形の萌芽が見え始めているものの、古典的厳格さや重厚さは感じられず、むしろ全体の高貴な優美さにいっそう寄与しているようである。このような後期バロックあるいはロココ的な優美さのなかに、古典的な造形を控え目に程良く加味することで多様な曲線の混乱を抑制して、高貴な気品の保たれた節度ある統一感を与える造形精神こそが、“Zopf Stil”という独特な雰囲気空間を創り出したのである³¹⁾。

またピガージュと似た印象を抱く作品であり、北ドイツ・ロココの代表作と絶賛されるクノーベルスドルフの「サンスーシー宮」(1745-47,地⑧)も、独創的な「別荘」の好例である。マンサード屋根が長い両翼屋に低く押さえ込まれて隠された上に、丸屋根が目立って大きく突出することから屋根全体は三分割され、さらに幻想的な彫像装飾が多用されたため、この作品にはピガージュのような清楚な節度さが漂う建物の洗練した統一感は生まれず、後期バロックの強く残るロココ調にまとめられた。この邸館で繰り広げられた華やかなサロンや音楽会は「サンスーシー(無憂)」の名に相応しく、また「別荘(Maison de plaisance, Lusthaus)」の意味でもあった³²⁾。

こうしてロココの興隆のなかで盛期を迎えた「別荘」は、ブロンデル案に忠実なデュ・リーや独創的なピガージュという「二つのタ

庭園側ファサード

一階平面図(上：庭園側)

図-6.) J.C.シュラウン(1695-1773)
「ベック邸館」(1766-71)：地図⑩

イブ」によるブロンデル学派の活躍により、ドイツ各地域へ広められ、その風土文化のなかにしっかりと定着していったのである。

【C】後期：1760-70年代

十八世紀後半にもなると、ヴィンケルマンの古代芸術論やイギリスからのパツラーディアニズムなどの影響力がいっそう強くなり始め、本来フランスの後期バロック・ロココを基調として誕生した「別荘」の作品には、古典的な性格を帯びる傾向がいっそう濃厚となって時代の急速な古典思考の台頭とともに進展した。こうしたなかでブロンデルの「別荘」論を踏襲する作品も僅かながら創られ続けるものの、この1770年代を最後にブロンデル学派そのものの活動も古典主義を主潮とする時代潮流のなかで、その建築創造の性格を変えながら多様な展開を新たに生み出していった。

そこでまずピガージュと並んで独創的な建築家で、西南ドイツで活躍したブロンデルの高弟ド・ラ・ゲビエールによる「モンレボス邸館」(1760-64,図-5,地⑨)は、個性的な造形の上に古典的色調への変容をさらに進展させた。平面では、ブロンデル案を基にしつつ「モンモランシー邸館」などからの影響が重なって、横長の玄関ホールと楕円大広間を中軸としたアパートマン・ドゥブルの構成になっている。この楕円大広間の外部へ張り出す曲線は、目前に広がる大きな湖の庭園との空間連鎖を強調しており、ド・ラ・ゲビエールは自ら「湖の館」と名付けていた。また立面では、高く突出した巨大な丸屋根が両翼のマンサード屋根と分離するために、完全な三分割構成になっている。またマンサードの屋根面を低く押さえ隠すように水平軸が強調され、中央の丸屋根を支える柱が独立を強めるのは、古典主義造形への移行を表現するものであり、ここから先のピガージュ以上に時代の潮流に合った進展が明らかである。その上この直

図-7.) F.I.マンガン(1742-1800)
「モネ邸館」(1779-83): 地図⑬

後の作品「ソリテュード邸館」(1763-69, 地⑩)では、三分割構成は屋根だけでなく建物全体のヴォリュームをも完全に分割するまでになり、古典的造形はいっそう強められたのである³³⁾。

ところが、シュラウンの「ベック邸館」(1766-71, 図-6, 地⑪)やクループザツィウスの「ネシュヴィッツ邸館」(1766-75, 地⑫)のように、今なおブロンデルの「別荘」案に沿った作品を創作する例も幾つか見られるように、王侯貴族のなかにはロココ芸術への愛好を続ける模様が伝わってくる³⁴⁾。しかし、1730年代に確立したブロンデルのモデル案をなお参照するシュラウンやクループザツィウスから、色褪せた様相を見て取らないわけにはいかず、そして古典主義へ移行し始めた時代主潮には完全に追従できない一世代古い建築家の置かれた状況が読み取れる。なお彼らは共に、ブロンデルの「別荘」論など、フランスの新たな建築思想に影響を強く受けながら成長したドイツ人建築家であり、純粋なブロンデル学派ではなかった。

そしていよいよ時代主潮の変容を明確に物語るように、フランス人建築家マンガンによって、モーゼル河畔の古代都市トリーアに「モネ邸館」(1779-83, 図-7, 地⑬)が設計された³⁵⁾。この「別荘」作品は、フランス新古典主義建築の開幕作品として絶賛されるガブリエルの「プティ・トリアノン」(1762-64)などを基にして創り出されたものである。この立面には、屋根の形態にバロック的な造形が未だ残るものの、正面はすっかり完全な古典ファサードによってまとめられている。そして平面には、玄関ホールと大広間を中心に配置された部屋割り構成だけが基本的に受け継がれているものの、ロココ的な室内の曲線や外部の庭園への積極的な連鎖などはもう全く見られず、直線による古典的な厳格さによって仕上げられているのであった。そしてこの「モネ邸館」に見られた古典造形への移行のよ

地図-1.) ドイツにおける「別荘」の分布位置(本文で触れた作品 13)
(既に註 13 でも言及したように、論点を整理し分かりやすくするために、現在のドイツ地域に限定して作品の位置関係を示した。)

うに、その後の「別荘」は時代主潮に沿った展開を遂げて変容し、ブロンデルの理想案はもう過去のものとなっていった。

4. 結……ドイツの「別荘」受容とブロンデル学派の活躍

よって以上の考察から、十八世紀ドイツ建築におけるフランスからの「別荘」受容は、次のようにまとめて指摘されよう。

フランス宮廷文化が定着した十八世紀初期のドイツに、新たな建築思想や生活意識を表現した「別荘」は、ブロンデル学派の活躍によって受容され、ドイツ啓蒙主義建築思潮を大きく進展させたのである。このドイツの「別荘」受容の広範な普及の様子は、本稿で取り上げた作品の位置を示した地図-1.) によっていっそう明らかであり、さらにこの受容展開の過程を三つの時期に整理するとき、そこには後期バロック・ロココから(新)古典主義へ変遷する過渡的な建築思潮の動向も鮮明に見出すことができたわけである。

なお最後に一つ付け加えると、ドイツの「別荘」受容・後期における晩年のブロンデルとは、「ルイ大王の時代」の建築と文化を高く評価しつつも、「コンヴナンスの精神」を標榜する完全な古典主義思想へと結実し、来たる時代の基盤をしっかりと築き上げた³⁶⁾。さらにブロンデル学派の建築家たち、ド・ラ・グピエールやディクスナール、ピガージュ、デュ・リーを始め、ルドゥー、ゴンタルト、ヴァインリッヒなども、ドイツ各地の宮廷都市にロマン主義的古典主義へと到る萌芽的な建築作品を創り出して、ドイツ啓蒙主義建築思潮をいっそう豊かな成熟へ導き、次の十八世紀末からの新たな建築思潮の母胎を培ったのであった³⁷⁾。

註

- 1) 拙稿「十八世紀初期フランスとメゾン・ド・プレザンス ―フランス-ドイツ啓蒙主義建築思潮研究― その1」日本建築学会計画系論文集 523 号 p.315-322 1999.9.
- 2) J.-F.Blondel : De la distribution des maisons de plaisance et de la décoration des édifices en général, vol.2,Paris 1737-38 (Reprint,1967)
- 3) Max von Boehn : Deutschland in 18.Jahrhundert. Die Aufklärung, Berlin 1922 邦訳『ドイツ十八世紀の文化と社会』(飯塚ほか訳) 三修社 1984
- 4) H.Schmitz : Kunst und Kultur des 18.Jahrhunderts in Deutschland, München 1922 「ブロンデル学派 Blondel-Schule」の概念は、この書(S.164)に拠っている。
- 5) R.Dohme : Studien zur Architekturgeschichte des 17.und 18.Jahrhunderts in:Zeitschrift für bildende Kunst(Lützow) 1878 : Barock-und Rokoko Architektur,3.Bände,Berlin 1884-92
- 6) C.Gurlitt : Geschichte des Barockstiles,des Rococo und des Klassicismus in Italien, Belgien,Hollen,Frankreich,England,Deutschland, 3.Bände,Stuttgart 1887-89
- 7) A.E.Brinkmann : Platz und Monument,Berlin 1908 : Deutsche Stadtbaukunst in der Vergangenheit, Frankfurt am Main 1911 : Stadtbaukunst des 18.Jahrhunderts, Berlin 1914
- 8) W.Pinder : Deutscher Barock,Leipzig 1912
- 9) M.Wackernagel : Die Baukunst des 17.und 18.Jahrhunderts in den germanischen Ländern,Potsdam 1915
- 10) C.Habicht : Die deutsche Architekturtheoretiker des 17.und 18.Jahrhunderts in:Zeitschrift für Architektur und Ingenieurwesen,21(1916),22(1917),23(1918)
- 11) H.Heckmann : Baumeister des Barock und Rokoko in Sachsen, Brandenburg-Preussen, Thüringen, 3/7Bände,Berlin 1996-
- 12) I.Markowitz : Französische Architekten an deutschen Fürstenhöfen des 18.Jahrhunderts, in:Deutschen in Frankreich-Franzosen in Deutschland 1715-1789, Sigmaringen s.127-164, 1992
- 13) 「十八世紀のドイツ」とは、当時の状況からドイツ・オーストリア・スイスなどの「ドイツ語圏」地域を指すのがより適切であるが、本稿では、ブロンデル学派の「別荘」をめぐる活動域に着目していること、さらに視点を絞って整理することなどから、現在のドイツ地域に限定したい。
なお、十八世紀ヨーロッパ建築史の入門には、サマーソン(堀内正昭訳)『十八世紀の建築 ―バロックと新古典主義―』鹿島出版会 1993 が好著である。
- 14) 十八世紀フランスとドイツにおける宮廷文化の様相については、ほかに、拙稿「ヴァイマル精神と古典主義建築の性格論」日本建築学会計画系論文集 482 号 p.229-238, 1996.4.
拙稿「ヴァイマル古典主義建築の展開」日本建築学会計画系論文集 505 号 p.227-234, 1998.3. を参照していただきたい。
- 15,16) J.B.Rohr:EinLeitung zur Ceremonial-Wissenschaft Der großen Herren, Berlin 1733 vgl. H.Bauer:Barock, Kunst einer Epoche, Berlin, s.82-84, 1992
- 17) ベヴスナー(中森・内藤訳)『美術アカデミーの歴史』中央大学出版部 1974 の第3章「バロックとロココ」を参照。ドイツでの建築アカデミー創設は、ベルリンやドレスデンの早いもの以外は、フランス人建築家の登用が終わる十八世紀後半の60-70年代に続々と誕生することになった。
- 18) フランス・ユグノーのデュ・リーによるカッセル宮廷での活躍については、拙稿「ルドゥーのカッセル凱旋門計画案めぐって ルドゥーとデュ・リー」福井大学工学部研究報告 45 巻 1 号, p.101-115, 1997 を参照していただきたい。
- 19) ブロンデルの芸術学校開校(1743)に際して王立建築アカデミーとの衝突があったように、フランス本国では権威的で保守的なアカデミー派の存在が大きいこともあって、ブロンデル学派が大々的に活躍するのに隣国ドイツの状況は好都合だったのではないだろうか。またブロンデル学校でのフランス人に限定しない多国籍の学生を受け入れる自由な雰囲気、フランス以外のドイツへ進出するのに大きく作用したと思われる。さらに十八世紀の時代精神も働いたであろう。
- 20) H.-W.Kruft : Geschichte der Architekturtheorie, München s.195, 1991
なお十八世紀ドイツの建築書については、先のハービヒトの論文のほかに、7.Bibliographische Berichte. Die deutsche Architekturtraktate des 18.Jahrhunderts in : Das achtzehnte Jahrhundert 5, 1981 p52-65 を参照されたい。
- 21) H.-W.Kruft : ibid.,s.198-201, C.Habicht : ibid.,22(1917)s.209-243
vgl. C.Schädlich : Die Grundzüge der klassischen Architekturtheorie,Versuch einer Wertung der Schriften des L.C.Sturm(1669-1719),in:Wissenschaftliche Zeitschrift der Hochschule für Architektur und Bauwesen Weimar,1957/58 s.73-76
- 22) L.C.Sturm : Erste Ausübung der Vortrefflichen und Vollständigen Anweisung zu der Civil-Bau-Kunst Nicolai Goldmanns,Braunschweig 1699
vgl. W.Hentschel : Die Zentralbauprojekte Augusts des Starken, Berlin, s.75, 1969
「Gartenhaus」の用語は、「Land-」(後期ルネサンス)から「Lust-」(後期バロック・ロココ)への転換を掛け渡す「盛期バロック」の時代を思わせる。
- 23) P.Decker : Der Fürstliche Baumeisters Anhang Zum Ersten Teil,Augsburg 1713 vgl. W.Hentschel : ibid., s.76
- 24) J.B.Broebes : Vues des palais et maison de plaisance de S.M.Le Roy de Prusse,Berlin 1733 vgl. : H.Schmitz:Preussische Königsschlösser,Berlin 1927, s.47
- 25) J.H.Zedler : Große vollständiges Universalexikon, Bd.18:Lo-Lz. Halle u. Leipzig 1738
- 26) J.F.Penther : Ausführliche Anleitung zur Bürgerlichen Bau=Kunst enthaltend ein Lexikon Architectonicum,4.Bände,Augsburg 1744-48 vgl. H.Bauer:ibid.,
- 27) ここでの考察対象については、J.-F.ブロンデルの「別荘」モデル案に提示された平面や立面等の構成から顕著な影響を受けて創造された代表的作品に絞って選択した。この選択された作品の一つ一つには、面規模や使用目的等において若干の相違はあるものの、私的な享楽生活を自由に満喫する場所を求めた王侯貴族の嗜好から誕生した建築(=「Maison de plaisance」)の性格として共通する。本研究では分かりやすくするために「別荘」と便宜的に邦訳しているものの、これは単に附属屋あるいは庭園建築という狭義の建築作品に実際上留まるものでは決していない。「Maison de plaisance」の有する新たな建築思想を合わせて考えても、この影響は建築的な規模や用途を超えて、王侯貴族の生活を演出するいろいろな場所に浸透したのではないと思われる。このような判断によって本研究の考察に相応しい建築作品を選択した。
- 28) vgl. F.Wolf : François de Cuvilliés,München 1967
- 29) vgl. H.-K.Boehlke : Simon Louis du Ry, Kassel, 1983
- 30) vgl. W.May : Schloß Martinskirchen und die Beziehungen zwischen Knöffel und Krubsacius, in:Wissenschaftliche Zeitschrift der Technischen Universität Dresden, 18 (1969),s.47-55
- 31) “Zopf Stil”の様式名称は、戦前のドイツの美術研究で頻繁に使われたが、近年はあまり使われなくなった。
- 32) vgl. H.-J.Kadatz : Georg Wenzeslaus von Knobelsdorff, München 1985
- 33) vgl. H.A.Klaiber : Der Württembergische Oberbaudirektor Philippe de la Guépière, Stuttgart 1959
- 34) vgl. Boer,Lechtape,Buske : J.C.Schlaun, sein Leben,seine Zeit,sein Werk, Münster 1995
- 35) vgl. H.-C.Dittscheid,R.Schneider : François Ignace Mangin und Baukunst des französischen Klassizismus,Mainz 1981
- 36) ブロンデルの建築思想概要については、白井秀和訳『ブロンデル 建築序説』中央公論美術出版 1990 の訳者付論を参照されたい。
- 37) ドイツ啓蒙主義建築思潮研究をさらに遂行する上で「別荘」をめぐる残された今後の課題を考えるために、現代の建築事典の項目「別荘 Lusthaus」は示唆深い。「別荘とは、イタリア・ルネサンス以来、美しい庭園と結合して創られた一つの独特な建築様式である。17-18 世紀には庭園への開かれた広間を持つ邸館としての Villa や Lustschloß へと進展する(ヴェルサイユやニュムフェンブルクなど)。さらにフランス後期バロックでは Maison de plaisance という新しい空間の理想形式の成立へと到り、そして 19 世紀には、バヴィリオンや東屋のように簡略化されつつも新たな展開を見せることになる。」
H.-J.Kadatz : Seemanns Lexikon der Architektur, Leipzig, s.159, 1994
簡略ながらこの項目における十九世紀以降のバヴィリオンと東屋との関係や、近代建築における新展開は興味深い。さらにまた、十八世紀後半のドイツにおけるパッラーディанизムや風景式庭園との関係も今後の課題には見落とせない。

図版出典

- 図-1.) J.-F.Blondel : De la distribution des maisons de plaisance et de la décoration des édifices en général, 1.vol., Paris 1737-38 (Reprint,1967)
- 図-2.) F.Wolf : François de Cuvilliés,München 1967
- 図-3.) D.v.Frank : Die maison de plaisance,München 1989
- 図-4.)Stadtmuseum Düsseldorf(Hrg.) : Schloss Benrath und sein Baumeister Nicolas de Pigage,1996
- 図-5.)H.A.Klaiber : Der Württembergische Oberbaudirektor Philippe de la Guépière, Stuttgart 1959
- 図-6.)Boer,Lechtape,Buske : J.C.Schlaun, sein Leben,seine Zeit,sein Werk, Münster 1995
- 図-7.)H.-C.Dittscheid,R.Schneider : François Ignace Mangin und Baukunst des französischen Klassizismus,Mainz 1981
- [表-1.]、[地図-1.] : 筆者作成

(1999年12月9日原稿受理, 2000年5月8日採用決定)